
残り香

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残り香

【Nコード】

N2577P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

伊吹政孝は香水を着けないのにその香りがする。それはどうしてか。夫婦の愛情をエロティックに書いた作品です。

第一章

残り香

伊吹政孝はだ。香水をつけない。しかしである。

「あいつが傍を通るとな」

「ああ」

「いつもだよな」

「いい香りがするわね」

「本当にね」

社内でもいつも評判になった。

「物凄くいい香りだけれど」

「薔薇？」

「そう、薔薇だよな」

「あの香りはね」

「間違いありませんよ」

社内ではその香りが何かも評判になっていた。

「薔薇の香水をつけてるのかな」

「あれで意外と洒落者だしな」

「香水をつけてもね」

「おかしくありませんよね」

しかし彼はだ。そのことについては笑顔でこう言うのである。

「僕は香水なんて付けないよ」

「けれど実際に」

「薔薇の香りがするし」

「そう言われてもちよっと」

「香りは」

「ははは、けれど本当に着けないよ」

それは常に否定するのだった。

「調べてもらってもいいよ。服に香りがするかな」

こうして実際に服やネクタイを調べるとだ。そこからは何も香りがしない。全くの無臭、清潔そのものの香りと言っているものだった。

それを確かめてだ。皆は言うのであった。

「あれっ、全然香りがしないし」

「どうしてなんだ？」

「確かに薔薇の香りがするのに」

「何故なんですか？」

「どうしてだろうね」

政孝はここでもいつもとぼけたように言うのであった。

「それは」

「あっ、隠してる」

「何なんだよ」

「隠すなんて酷いですよ」

「そうですよ」

「それでもすぐにわかることじゃないかな」

こう言うだけの彼だった。

「これってね」

「わかるか？」

「いや」

同僚や後輩達は首を傾げさせて言う。

「ちよっとな」

「そうだな」

「どうして香るかなんて」

「わかる筈が」

「すぐにわかると思うけれどね。そう」

政孝はここで楽しげに笑ってだ。そのうえで言うのだった。

「相手がいればわかることかな」

「相手って」

「一体？」

「どういう意味なんですか？」

「やっぱりわかりません」

「だからすぐにわかることだよ」

政孝はここでも笑っていた。

「すぐにね」

「ううん、何なんだ」

「すぐにすぐにつて」

「それでわかれば苦労はしませんけれど」

「全くですよ」

「僕が言うのはこれだけだよ」

彼はここまで話してそれで話を切ってきた。そうしてであった。

第二章

「それじゃあ」

「はい、それじゃあ」

「仕事だよな」

「それですよ」

「今日は少し遅れているからピッチをあげようか」

政孝はこう言って自分の席で書類のサインを進めていく。

「さもないと残業になるよ」

「げっ、それはちよっと」

「今夢中になってるゲームありますから」

「今日はあのドラマの日ですし」

「帰ってお酒飲まない」と

彼等はそれぞれの事情を言う。

「今日は早く帰りたいしな」

「じゃあ今から頑張って仕事するか」

「そうですね」

「お酒ちゃんの為に」

「早く帰りたければ真面目に仕事をしないとね」

今度は悪戯っぽい笑みになって話す政孝だった。言葉を出すその間も書類にサインをする手は止まらない。かなり早い動きを見せていた。

「そういうことだからね」

「やるか」

「そうだな」

こうしてだった。彼等は真面目に仕事をした。そのうえでそれぞれの楽しみに向かう。そして政孝もまた。電車から自分の家に帰った。

マンションの扉を開けるとだ。すぐにクリーム色のエプロンに淡

い茶色の髪をウェーブにさせた小柄な女性が出て来た。幼い顔立ちをしていて眉は細く長い。目がかなり大きくいささか垂れ目になっている。その黒い目がかなり目立つ。肌はきめが細かい。小柄なその身体は胸の小さが目立つ。

その彼女がだ。彼を出迎えて笑顔で言うのだった。

「おかえりなさい、あなた」

「うん、小真」

彼は笑顔で彼女の名前を呼んだ。

「どうだった？今日は」

「特に何もなかったわ」

「そうなんだ」

「私の職場では特にね」

「なかったんだ」

「いつも通りよ」

こう話してそれで玄関で靴を脱いでいる夫を見ていた。

「普通にお仕事してそれでね」

「そうなんだ」

「それで今日の御飯だけれど」

「何かな」

「コロッケよ」

笑顔で彼に告げる。

「それとレタスとトマトのサラダ。お味噌汁もあるわよ」

「お味噌汁は何のお味噌汁かな」

「大根と薄揚げのよ」

それだというのだ。

「それをなのよ」

「そう。それなんだ」

「あなたが好きだからと思って作ったんだけれど」

「有り難う。じゃあこれから二人でね」

「食べましょう。まずは食事ね」

「はい、それじゃあ」

こんな話をしてだった。そのうえでマンションの部屋の中の廊下を進んでだ。リビングに入った。そうしてそこでだ。二人で話すのだった。

「そっちは何ともなかったのね」

「こっちも平和だったよ」

政孝はにこやかな笑顔で小真に返す。二人は檜のテーブルに向かい合って座ってそのうえで夕食を食べながら話をしている。

「とてもね」

「そうなの。お互い平和だったのね」

「今日も世の中こともなしかな」

「こうも言う政孝だった。」

「有り難いことにね」

「そうよね。平和が何よりよ」

「最近治安が悪くなってきたいてもそれでもね」

「ええ。それで御飯の後はどうするの？」

「決まってるじゃないか。お風呂に入るよ」

「それだというのだ。」

「そしてそれからね」

「ふふふ、そうね」

小真は夫の言葉にだ。にこやかな笑顔で返した。

「二人でね」

「お風呂先に入ろうか」

「いや、それよりもね」

「それよりも。そうね」

「二人で入ろう」

彼もまた妻に告げた。

「二人でね」

「その方がお風呂も楽しいわよね」

「だからこそね。そうしよう」

「わかったわ。それじゃあ」

こんな話をしてだ。二人は夕食の後で仲良く一緒に風呂に入った。そうしてそれからだ。身体を拭いた小真は二人のベッドがある部屋に一糸まとわぬ姿でいた。

第三章

胸は小さく全体的に幼い身体をしている。だが肌は白く雪の様でありその幼い身体も均整が取れている。悪い肢体ではない。

その彼女はベッドの枕元の灯りを頼りにそこにある一つの瓶を取った。そしてそこから液を出してそれを首筋や胸、そして脚にも他の部分にも塗るのだった。

政孝は既にベッドの中にいる。そこで妻がすることを見ていた。

「いつものだね」

「うん。だってあなたこの香水が好きだから」

「好きだからじゃないんだよ」

夫は微笑んで妻のその美しい裸身を見ながら言った。

「好きになったんだよ」

「なったのね」

「そうだよ。それじゃあね」

「ええ、そうね」

「もう塗ったし来てくれるかな」

妻に告げる。

「ここにね」

「ええ、それじゃあ」

その香水を塗り終えた小真は微笑んで。そうしてだった。灯りを消してだ。夫の傍に来た。後は言うまでもなかった。

それが一度終わってからだ。妻はベッドで隣に寝る夫に問うた。

彼は小柄な彼女と比べるとだ。三十センチは高く大きかった。

「ねえ」

「ねえ？」

「どうして好きになったの？」

こう夫に問うのだった。彼に寄り添いながら。

「今の私が着けている香水が」

「それはね」

「それは？」

「小真が付けてるからだよ」
だからだというのだった。

「それでなんだよ」

「それでなの」

「最初に会った時にもう付けてたよね」

「そうだったかしら」

「忘れていないよ」

微笑んで妻に言う。

「その時のことはね」

「もう随分と昔のことじゃないかしら」

「昔でも忘れていないよ」

「そうなの」

「だから。忘れる筈がないじゃない」

また妻に対して告げた。

「あの時から変わっていないしね」

「そんな筈ないじゃない」

小真は夫の今の言葉にはすぐにくすりと笑ってみせた。

「あの時お互いに大学生で」

「そうだったね」

「あれから七年よ。もうお互いね」

「二十七になったよね」

「それで変わってない筈ないじゃない」

こう言う妻だった。

第四章

「あの時から。そんな」

「いや、変わっていないよ」

しかし夫はこう言うのであった。

「君はあのまま。奇麗なままで」

「そうかしら」

「それにその香りも」

次に話したのは。妻のその香りだった。

「香水の香りもね。あの時のままだね」

「この香水って全然いい香水じゃないのよ」

小真は少し謙遜したかの様に夫に話した。

「もうね。全然」

「そうなの」

「香りもそんなにしない筈よ」

「けれど君のその本来の香りと合さって」

「いい香りになるのね」

「そうになっているよ。だから」

そっと妻の身体に自分の身体を寄せてきてだった。

「またね」

「また、ね」

「いいかな、また」

こう妻に問うのだった。

「これからもう一回」

「……いいわよ」

妻は夫のその願い出に穏やかな微笑みを見せた。

「来て」

「うん、それじゃあ」

こうして政孝はこの日も妻を愛しその身体と深く触れ合った。そ

うして次の日もだ。その香りについて皆から言われるのであった。

「やっぱりねえ」

「香り凄いよ」

「何か今日は特にですけれど」

「もう薔薇そのものみたいですよ」

「あはは、薔薇そのものなんだ」

政孝は同僚達の言葉にまた笑う。

「そうかもね。僕にとってはね」

「僕にとってはねえ」

「何かやっとなつていたけれど」

「ひょっとしてそれって」

「奥さんの」

「さあ、どうなのかな」

正解にはとぼけてみせたのだった。

「それはわからないね。ただ」

「ただ？」

「何ですか？」

「愛している相手がいるのは幸せなことだよ」

言うのはこのことであつた。

「とてもね。そしてその全てを愛せることは」

「それは？」

「どうだっていうんですか？」

「さらに幸せなことだよ。その全てをね」

こう言つてであつた。政孝は今日も己の身体に残っている妻の香りを樂しむのだった。それは夜まで消えない。そして夜になればまたその香りを受ける。彼の残り香はそのまま妻に対する愛情であつた。常に自分と共にある愛であつた。

2
0
1
0
•
8
•
3
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2577p/>

残り香

2010年12月1日22時25分発行